【別添２】

13	国立 筑波大学附属小学校	R2～R5

令和５年度研究開発自己評価書

Ⅰ　研究開発の内容

１　教育課程

（１）編成した教育課程の特徴

本校における研究開発課題は、「資質・能力の育成を志向するために真に必要な各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、主要な概念を効果的に指導するのに必要十分な個別的な知識を明らかにすること、またこれらに立脚した各教科等における指導内容の構造化、すなわち新しいカリキュラム創出に関する研究開発」である。

本研究における教育課程作成上の特徴は、各教科等の本質をなす主要な概念を抽出する際に、まず現行学習指導要領に則って教育活動を行なっている実践者の立場から、各教科等が有する課題や問題点を明らかにしたことにある。

結果、以下の４点に課題や問題点が集約されることが明らかになった。

① 現行学習指導要領で示されている指導内容が過多、あるいは曖昧であること（学習指導要領の問題）

② 学習指導要領の理解が現場教師に足りない、あるいは授業の進め方に問題がある（現場の問題）

③ その教科に配当された年間指導時数が多すぎたり少なすぎたりする

④ 教科書に関する問題

各教科等によって抱える課題や問題点が異なるので、当然ながら解決の方法も異なる。

本研究に取り組む発端となった問題意識は、カリキュラム・オーバーロードにあったわけだが、上に挙げた各教科等が抱える課題や問題を解決することと、カリキュラム・オーバーロードの問題を解決することを研究推進の両輪と捉え、実践的・理論的な研究を進めてきた。

一昨年度（研究第２年次）は、「各教科等の本質をなす主要な概念」を抽出し、その上で「各教科等における個別的な知識」の精選を行なった。研究推進の核（点）となる部分を創出したと言える。さらに、各教科等において、日々の実践をもとにして「指導内容の構造化」にも着手した。指導内容の構造化と言うのは、研究の核（点）である「各教科等の本質をなす主要な概念」と「各教科等における個別的な知識」をつなげて、「指導の系統」を創出することである。言い換えれば、「点から線へ」というイメージで、研究が進められたのである。

そして、昨年度（研究第３年次）は、第２年次までにつくった各教科等における指導内容の構造をさらに広げる作業を中心に研究を進めた。言い換えれば、「線から面へ」というイメージで研究が進められたのである。また同時に第３年次では、実践を進める中で第２年次までにつくった各教科等における個別的な知識についての見直し、再構築、カテゴライズも進められたことは成果であった。

本研究第２年次から明らかになっているとおり、算数科や理科は、もともと現行学習指導要領の学習内容がしっかりと構造化されており、学習内容それ自体をスリム化することは困難であるという結論に達している。しかし、算数科は、図形分野における効率的な指導内容の構造化に成功し、理科は、個別的な知識を再構築して、学びの系統を新たにつくり替えることに成功した。この点は特筆に値する。また、体育科も同様に個別的な知識（技能）を再構築する試みを行い、

学習内容のスリム化を現実のものにしつつある。
一方、国語科、音楽科、図工科などは、もともと学習内容やその構造が明確ではないという問題を抱えており、独自の個別的な知識やその構造を創出している点に特徴がある。
このように本研究では、各教科等における学習内容の構造化が各々のオリジナリティをもって進められた。そして学習内容の構造化そのものが、本校の新しいカリキュラムの創出になるわけだが、創出にあたっては、日々の授業の積み重ねの中で各教員が肌で感じる子どもたちの反応や、教員がもつ教科への見方や考え方を大切にしていることに、本校教育課程作成上の特徴があると考えている。一言でいえば、現場教師の肌感覚を重視したカリキュラム創出ということができるのである。
また、本研究では「40 分授業の試行」も研究内容の一つとして挙げている。これについては、一昨年度の報告に挙げたとおり「不要な、あるいは省略できる前時想起の時間や、本時振り返りの時間を省くことで、40 分授業での学習内容定着は可能である」という結論に至った。

尚、本研究は、本校学校研究（テーマ「『美意識』を育てる」）と並行して進行してきた。各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、あるいはそのもとにある編成原理、また具体的に目指す子ども像については、学校研究でいうところの「美意識」を常に意識したものである。学校研究の内容である「『美意識』研究に根差したカリキュラム」、これが本校の目指す教育課程のもう一つの特徴ということになろう。
学校研究で定義している「美意識」とは、「その子の『みえ方』や『こだわり』をもとに、本質を捉え深めようとする心の働きである。それは『共に幸せに生きるために発揮される資質・能力』の源である」としている。
現行学習指導要領では、３つの資質・能力育成の重要性を説いている。本校としてもその重要性を共有している。しかし、例えば、単に多くの知識や技能を蓄積すればよいというものではない。間違った方向に知識や思考力を働かせてはいけない。本校では、資質・能力を本質的で望ましい方向に働かせようとする「何か」があり、そこに働きかけるような教育活動を行おうとする立場に立っている。つまり育成すべき資質・能力、その深層、あるいは下層の部分に育てるべきものがあると仮定し、それを「美意識」と名付けることとしたのである。すなわち、子どもに「美意識」を育てることを一義にすること、これを本研究で構築するカリキュラムの編成原理としながら、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、さらには各教科等の個別的な知識の精選を行い、カリキュラム構築に漕ぎつけるという道筋を想定したのである。
本研究期間を通して、特に子どもの教材などに対する「みえ方」をより大切にして授業を構築することが「美意識」を育てる上で肝要であることが確認されたところであり、そのことがカリキュラム創出にも少なからず影響していることが特徴であると考えている。

（２）教育課程の内容は適切であったか

各教科等において創出した新カリキュラムに則り、日々の授業実践を積み重ねているところであり、全体のカリキュラムが適切であったかどうかの判断は難しいと言わざるを得ない。
しかし、各教科等において成果を得られつつあるという実践事例報告は複数存在している。
例えば音楽科では、音楽科の個別的な知識を精選し、それに基づいて授業実践を積み重ねている。すると、結果的には教科書に掲載されている教材をはじめからすべてなぞっていく必要はなく、扱う教材数を減らしつつも、最低限必要と思われる個別的な知識や技能を身に付けさせることができるということを実感しているところである。このことは、同時に教材数を減らすことで、一つの教材にかける時間を長くすることも可能にする。じっくり学ばせることができる、つまり深い学びにつながるのである。しかも、新しい個別的な知識や技能を、あるいは思考に関わ

る活動として適切な教材について、じっくりと時間をかけて学ばせることによって、その系統に属する以降の教材については、加速度的に子どもたちの理解が進み、授業時間の短縮、効率化を可能にすることも現実に起こっている。

このことは、音楽科にのみ起こっている現象ではなく、複数の教科から報告が上がっていることは特筆すべきことである。これらの事実から、現在途上にあるカリキュラム創出、その内容が間違った方向には進んでいないと考えている。

（３）授業時間等についての工夫

① 1コマの授業時間を40分で行っている。5分短縮しても本来学ばせたい内容が不足なく身に付くようにしている。

短縮した5分は、不要な、あるいは省略できる前時想起の時間や、本時振り返りの時間を省くことで生み出すなどの工夫をしている。

② 1コマの授業を5分短縮することで生み出される一日30分程度の時間をどのように活用するのか。この課題についても昨年度の評価で説明している。授業と授業との間に通常5分の休憩を取るところを10分の休憩時間としている。その10分で、子ども自身が授業の振り返り、咀嚼を十分に行い、ときには教師に学習内容に関する質問をする、また次の授業会場への移動、準備を行うこととしている。

40分授業の実現は、児童に学びを定着させ、精神的肉体的な余裕を生み出させること寄与しているように思われる。

③ 週の時間割について、40分授業の実施によって生み出された時間の一部は、国語科の高学年、理科の第3学年、音楽科や図工科、体育科、家庭科の高学年に配当している。現行の学習指導要領では、例えば音楽科と図工科の年間授業時数は高学年で50時間である。

しかし、本研究では、「美意識」に根差した深い学びの実現を期して、これらの教科では高学年でも週2コマの授業を入れることとしている。つまり年間授業時数を高学年でも70時間設定しているのである。

④ 週の時間割において、金曜日午後の2コマは、全学級で総合的な学習の時間に充てている。これは、学年や学級の枠を超えて合同でダイナミックな学習活動を展開しやすいようにしている工夫である。

２　指導方法・教材等

（１）実施した指導方法等の特徴

カリキュラム・オーバーロードへの挑戦が、本研究の最大の使命であった。カリキュラムを現行よりも軽いものにするために、何をもって軽くできるのか、という問題があるが、その拠り所は大きく二つある。一つは、これまで自明視されてきた各教科等の編成原理を問い直すこと、そこから生まれる各教科等の本質をなす主要な概念の抽出等を行ったことである。そこには、本校がこれまで蓄積してきた研究の成果が大きな役割を果たしている。これまでの研究成果や教員が毎日の授業を通して体得または体感している職人的感覚は、運営指導委員の奈須正裕先生（上智大学）の言葉を借りれば「実践的信念」に当たる。またこの「実践的信念」は、フランスの社会学者ブリュデューが言うところの「実践感覚」とか「身体化された必然」という言葉に置き換えられるだろう。数値で示されることだけをエヴィデンスとするのではなく、教師としての感覚も本研究で多分に生かされている。

本研究における使命を遂行する際の拠り所の二つ目は、「美意識」研究である。前掲した本校研究「『美意識』を育てる」においては、「美意識」を備えた子ども、人を育てることを一義的に考えている（本研究における「美意識」の定義は前掲の通り）。その際、どの指導内容をどの

ように配列することが「美意識」育成に寄与するか、あるいは一時間の授業をどのように展開させると「美意識」が育つのか、という視座をもつ。

この「美意識」研究そのものが、本研究で構築するカリキュラムの「編成原理」というべきものであると考えている。

これら二つの拠り所をもって、毎時間の授業に当たっていることが特徴と言えるだろう。その具体を以下に示す。

＜音楽科の事例と分析＞

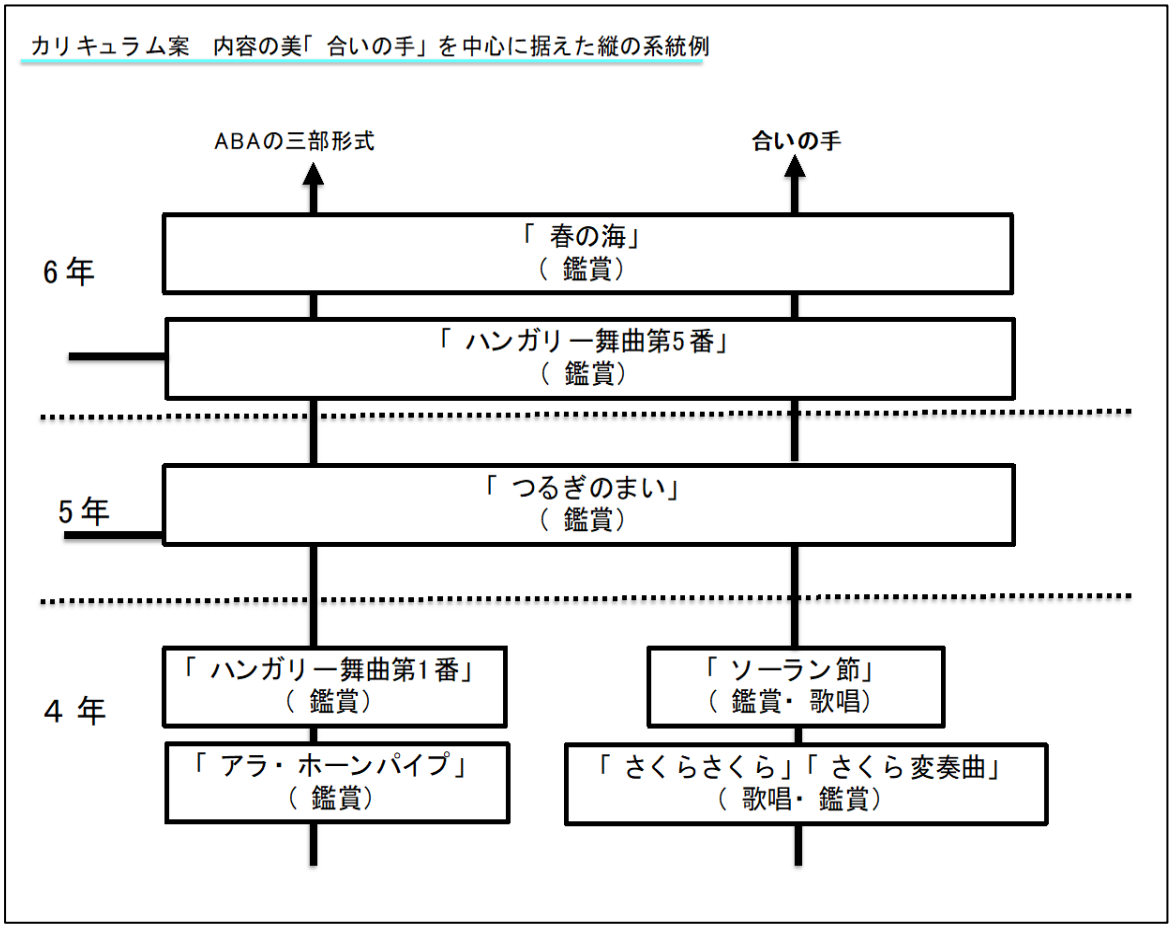
音楽科では、「音楽科の個別的な知識」の精選を行い、それぞれの個別な知識を系統立てて学ぶ意味を、子どもが認識できるようなカリキュラム創出を行なった。

ここでは、「合いの手」と「ABA の三部形式」という個別的な知識について、学年を跨いで扱うカリキュラムを紹介する。

例に挙げる実践は、5 年の鑑賞「つるぎのまい」である。一般的には「つるぎのまい」の学習内容は、以下の 4 つに挙げられるように多様に考えることができる。

① ABA の三部形式
② A 部に認められる「合いの手」（トロンボーンなどによる）
③ 終結部に認められる黒鍵による「５音音階」
④ 再現部に入る前のブリッジ部分に認められる変拍子のリズム

新しいカリキュラムでは、これらの学習内容を単発的に扱うのではなく、図にあるように系統的に扱うことで、知識のつながりを子どもたちが意識して学べるようにした。



4 年で学習した「さくら変奏曲」や「ソーラン節」で「合いの手」という概念のよさや面白さに気付いた子どもたちは、5 年になって「つるぎのまい」を鑑賞する。すると、教師のはたらき

かけがなくても「合いの手」の存在に気付くことができる。さらに、洋の東西を問わず、音楽には「合いの手」という仕組みが存在していることに気付く。単に教材そのものを演奏したり聴いたりするだけなく、世界の音楽文化まで思いが及ぶことが重要なポイントである。

同様に、図中の左側の系統は「ABA の三部形式」の系統である。やはり 4 年で学習した「アラ・ホーンパイプ」や「ハンガリー舞曲第 1 番」で三部形式を知った子どもたちは、「つるぎのまい」を聴いて、この曲も三部形式であることに気付くのである。繰り返しになるが、曲そのものを学ぶだけでなく、音楽に普遍的に含まれる要素や仕組み、さらには世界の音楽文化に対する気付きやリスペクトを促せるようなカリキュラムになっていることが重要であると考える。

合いの手を一つの学びの系統とすると、5 年の「つるぎのまい」から、その後は 6 年の「春の海」へと学びが積み重ねられるのである。さらに広く捉えれば、常時活動などで歌われている「幸せなら手をたたこう」（アメリカ民謡）などにも合いの手があり、それらを系統の中に位置付けていくことも考えられる。

また、音楽科における新カリキュラムは、一本の学びの系統が単独で林立しているのではなく、縦や横、そして斜めに複雑に絡み合って蜘蛛の巣のように、あるいは東京メトロの路線図のように成り立っていることも特徴である。

新カリキュラムの創出により、これまでより系統を意識して指導することが可能になった。そこには、「教科がもつ個別の知識」の洗い出しが非常に重要であったことも、本校教員が感じている成果であり、特徴である。

このように、音楽科では、教師による教科がもつ個別の知識の洗い出しをもとに学びの系統を立て、その系統をこれまで以上に意識して授業を行うことで、子どもの音楽に対する理解が深度を増し、また理解の速度も上がった。

（２）指導方法等は適切であったか

音楽科にとどまらず、全教科等において、児童の、教材などに対する捉え方である「みえ方」を基盤にして授業を展開することを大切にした。その結果、児童は教科固別の知識を教師から教えてもらうのではなく、自らの手で学んでいくことを実感することが多くなった。それら個別の知識を有機的につなげて学びの系統をつくり、新カリキュラムを創出したのである。それが本校の授業改善および指導改善であった。

これによって、児童の授業に参画する姿勢もさらに良質のものとなり、理解度の高さ、速さにも影響していると実感するところである。

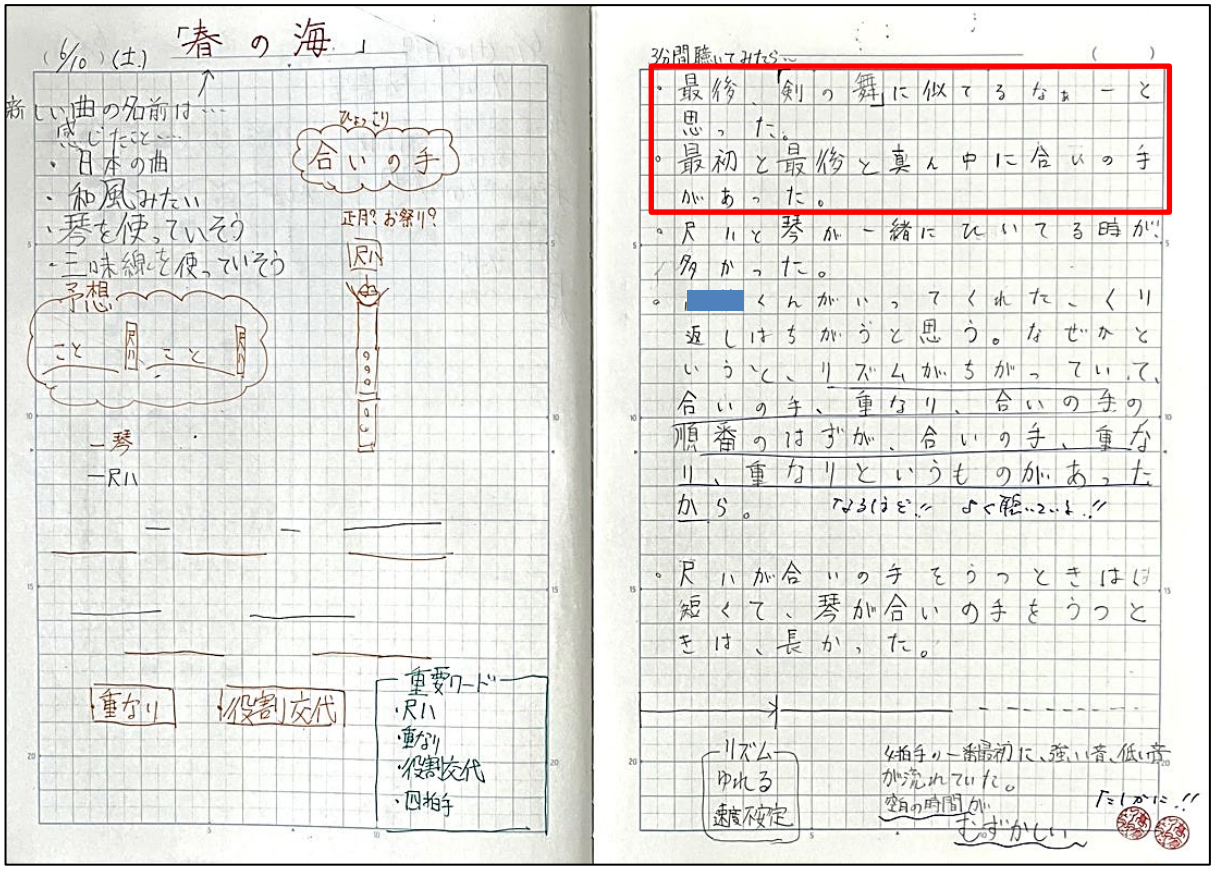
音楽科では、4 学年の歌唱共通教材「もみじ」の楽譜を初見する段階で（範唱を鑑賞しない段階）、それがカノンの仕組みになっていることに気付く児童がほとんどであった。「どうしてカノンってすぐにわかったのか」を尋ねると、「2 年生で『かえるのがっしょう』をやったときにカノンって習ったし、3 年生の『雪のおどり』や『ファランドール』にもカノンが出てきたよ」という返答が返ってきた。

教師が「カノン」という系統を意識して指導することで、児童への「カノン」という知識の定着が確実になり、それが学年を超えて転移していることが確認できた。

以上の事例にもみることができるように、本研究によって開発された「みえ方」を大切にした指導方法は適切であったと判断する。

Ⅱ　実施の効果

1　児童・生徒への効果

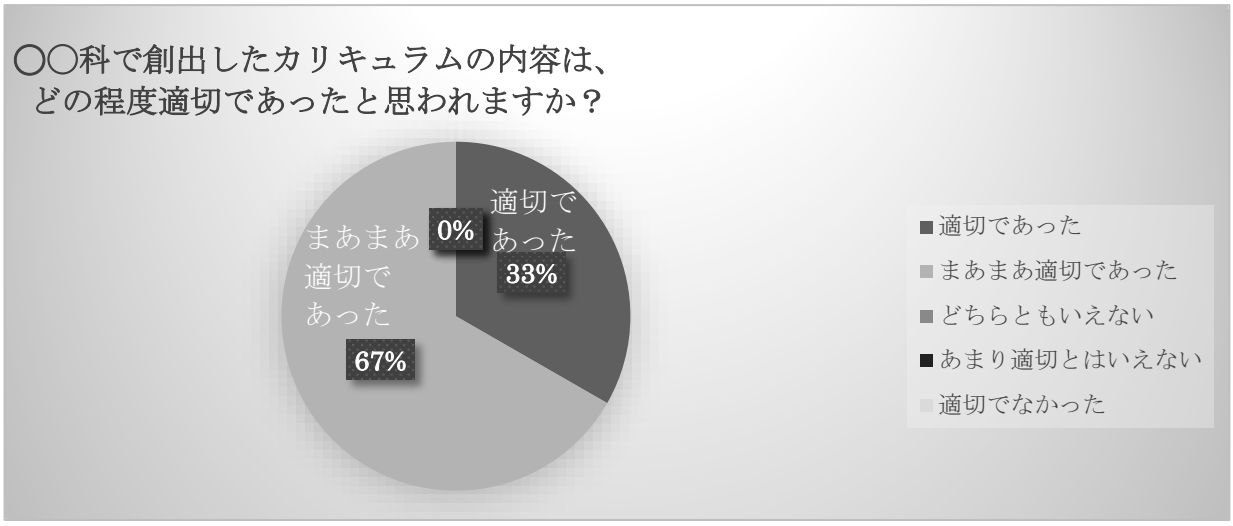


音楽科の例にあるように、一つの教材、あるいは題材、単元の学習が、点ではなく、線や面で結ばれるようになったことが、子どものノートや発言などから見取ることができるようになってきている。つまり児童への効果が可視化できるようになってきたと考えている。

上のノートの例は、音楽科６学年の例である。鑑賞で「春の海」（宮城道雄作曲）を聴いた際、赤枠内のように「『剣の舞』に似ているなぁと思った。最初と最後と真ん中に合いの手があった」と記述しているのが見て取れる。これは、「合いの手」という学びの系統で、５学年で学んだ「剣の舞」と６学年で学ぶ「春の海」が、この児童の中でつながった証拠である。一聴してこの気づきが生まれていることが、本研究の取り組みの効果の例とみることができる。

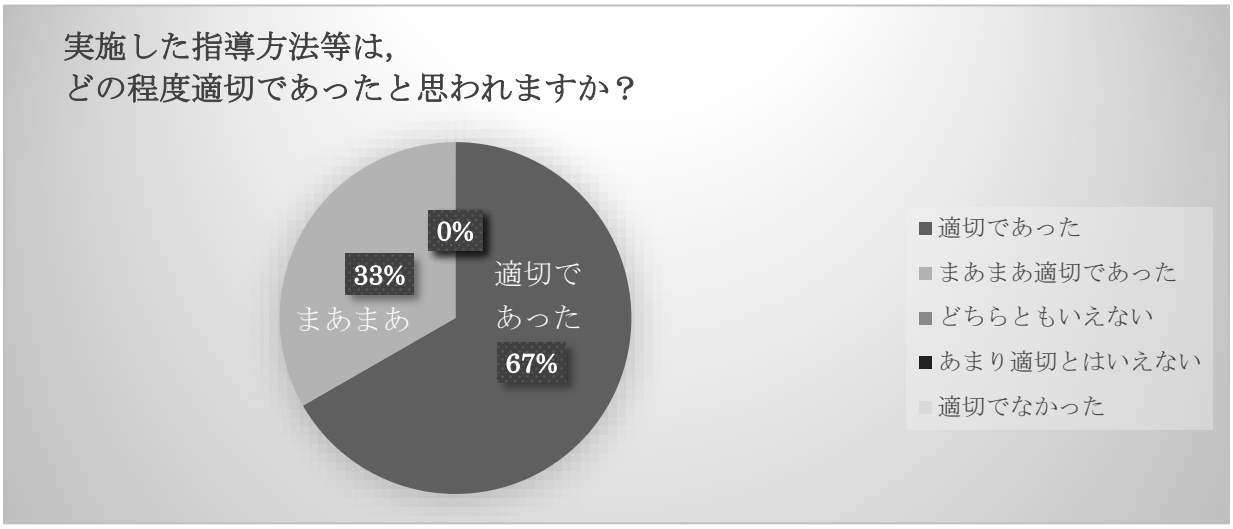
２　教師への効果

4 年間の本研究を振り返って、研究推進を中心に進めた教員チーム 9 名にアンケートをとった。そのうちのいくつかの設問について、以下に紹介する。



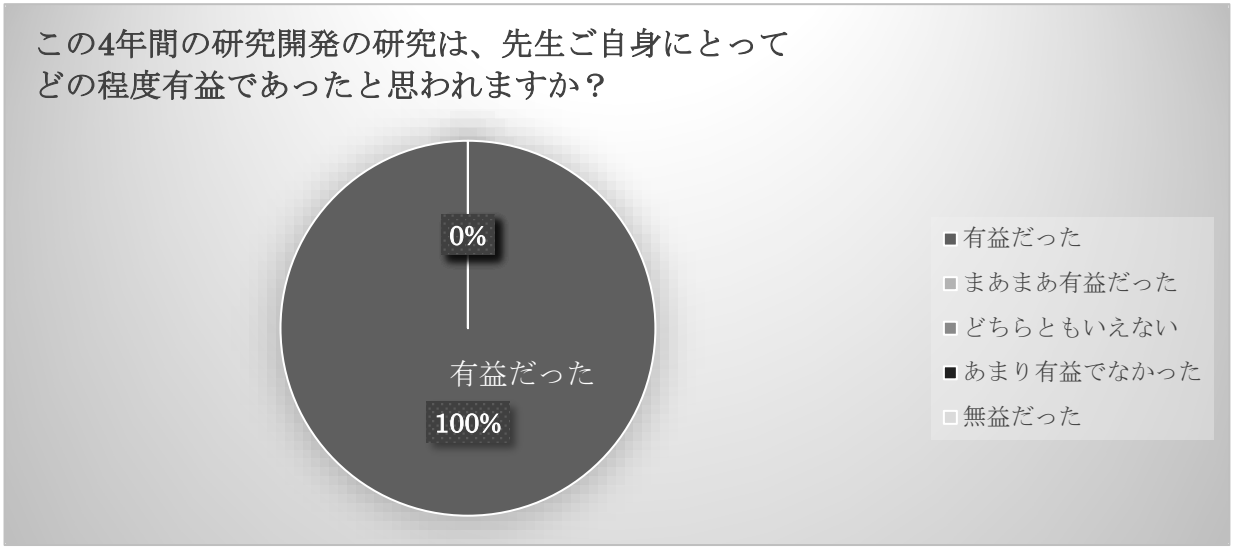
上記の設問「〇〇科で創出したカリキュラムの内容は、どの程度適切であったと思われますか？」に対しては、「まあまあ適切であった」の 66.7%が「適切であった」の 33.3%を大きく上回った。このことについて、以下のようなコメントがあった。

図工科では、限られた時数の中で、「もの」「こと』」「ひと」という３つ領域を子どもたちが自ら横断していく姿がみられた。コロナ禍の中でのオンライン環境も一つの学びの場となり、図工室と家庭での学びがつながり、「もの」「こと』」「ひと」を対象につくることとみることが、とても自然に一体化できていた。「まあまあ」という表現になったのは、まだ「もの」「こと』」「ひと」ユニットを可能にする題材や活動の事例が少ないためである。



逆に、上記の設問「実施した指導方法等は、どの程度適切であったと思われますか？」に対しては、3 分の 2 の教師が、「適切であった」と回答した。

外国語科では、英語によるやり取りにおいて、聞くことから段階的にはじめ、個別の知識を使えるようにする実践を重ねた結果、子ども同士のやり取りにおいても、１分間のチャットや交流会などにおいて、コミュニケーションの継続を図ろうとする姿勢が見られた。それは、系統だてた知識を知っているだけに留まらず、それをいかに使ってコミュニケーションを図るかといった視点でとらえられた結果だと思われる。



アンケート最後の設問「この４年間の研究開発の研究は、先生ご自身にとってどの程度有益であったと思われますか？」に関しては、すべての教師が最高位である「有益だった」と回答している。

カリキュラムを編み直すということは、教師が「教えたい」と願う「教科の本質」と子どもが「学びたい」と願う「みえ方」や「こだわり」との「せめぎ合い」を通して「授業改善」をし続けていくという不断の「営み」が必要不可欠である。それは、「教科の本質」とそれに迫るための「内容の美」や「方法の美」を明らかにし、子どもの「みえ方」や「こだわり」との結節点としての「子どもの問い」を成立させ、その問いの追究を通して子どもたちの中に育まれた「美意識」を見取り、「授業改善」をしていく…、実は、教師として欠かすことのできない大切な「営み」だったと今になって実感している。

本研究は、「筑波大学附属小学校版の学習指導要領をゼロベースで作成する」という意気込みをもって全職員で当たってきた。本校では３～４年間に一度のペースで、その時代にマッチしたテーマを掲げており、常に新鮮さをもって研究に当たることができている。本研究開発は「『美意識』を育てる」をテーマにした学校研究とタイアップして行ってきた。「美意識」研究をベースにカリキュラム作成に取り組むという難しさを感じつつも、精力的に研究を推進することができたこと、その達成感を上のアンケートから十分に読み取ることができた。

もちろん、すべてのカリキュラムを編めたわけではないし、改善点があることもあるが、本研究に取り組んだことで、さらなる授業改善、カリキュラム創出の意義について考える機会となったことは、全職員の共通の果実となった。

３　保護者等への効果

本校の使命として、常に将来の初等教育の在り方を実験的に探ることを掲げ、そのことを承知したうえで入学していただいている状況にある。したがって、研究内容に関する周知はもちろん、研究に対する理解をいただいているところである。

本研究に関しても、批判的な意見は聞かれない。

Ⅲ　研究実施上の問題点と今後の課題

研究開発学校の指定を受け、4 年間の研究に取り組んだ。元来、本校は各教科等の指導法などに関する理論的・実践的研究を進めてきている土壌もあり、全職員のマインドを揃えることに苦労はなかった。今回特別だったのは、ゼロベースで、筑波大学附属小学校版新カリキュラムの創出という課題があったことだ。ゼロからカリキュラムを立ち上げることは並大抵のことではなかったが、それだけにやりがいのある取り組みとなった。そのことは、職員へのアンケートからも十分に読み取ることができる。

今般の研究が全職員にとって有益だったことの要因は、「研究における自由度」と考えられる。特例をいただいて、40 分授業の実施、時間割の自由な編制が可能になったことで、思い切った研究ができたことが、職員の満足度を高めることにつながったと思われる。

研究実施上の問題点と今後の課題については、２つある。ひとつは、新カリキュラム創出にあたり、全ての教科等で、十全な指導計画が完成に至っていないことである。これは、問題点であり今後の課題である。令和 5 年度 3 月までは、研究を進め、その成果を学校ホームページ上などで公開したいと考えている。

もうひとつは、研究で得られた成果を今後の学校運営に生かすべく、柔軟な対応が望まれることである。40 分授業や柔軟な指導時数の運用は、かなり有効であることが感じられた。これをすべて標準のシステムに戻すことは、今後の学校運営には有益ではないように思われる。制度の整備において、柔軟な対応をお願いしたい。